

【論文】

広域共生をめざす政治的ナショナリズム  
1860年代後半のバルト・ドイツ人問題に関する  
カトコフの言論活動

山本 健三

Political Nationalism Aiming at Wide-Space Coexistence:  
Mikhail Katkov's Journalistic Activities on the Baltic German (Ostsee) Question  
in the Second Half of 1860-s.

YAMAMOTO Kenso

Mikhail Nikiforovich Katkov (1818-1887) has recently interested Russian researchers. After the dissolution of the Soviet Union, some anthologies of Katkov were published. Furthermore, many researchers have studied Katkov's works to defend dissertations and to release articles and monographs. That phenomenon reflects the actuality of Katkov on the ideological situation of contemporary Russian society. It seems that his concepts on Russian state and nationalism are linked with the discussion on the possibility of the concept "unity in diversity" in Russian Federation. Political nationalism, deduced from Katkov's "theory of Russian statehood," is such a concept that enables ethnic groups to coexist in the wide space of Russia. Katkov's concept of Russian nationalism gives inspirations to the people who are longing for the realization of the concept "unity in diversity."

In this article, we analyzed Katkov's political articles on the Baltic German (Ostsee) Question in the second half of 1860-s because he precisely developed the concept of political nationalism particularly in this period. We defined Katkov's concept of nationalism as "Political Nationalism Aiming at Wide-Space Coexistence" in the sense that it is the concept aiming at the political unity based on the neutrality of Russian state to cultural elements. According to his concept, Russians are politically superior to other ethnic groups as the only "political nation" in Russia, but are culturally equivalent to others. This logic enables Russians to play the leading role in Russia.

Furthermore, we noted the importance of Katkov's discourse in the war of words on the Baltic German Question in the second half of 1860-s. Making the concept of "German intrigue," according to which, Baltic Germans are aiming at the position of "political nation" to establish the political role of "German nation" in Russian Empire, Katkov succeeded to propagate the more dangerous threat of "German intrigue" than "Polish intrigue" to Russians. Along with Yurii Samarin's "Russian Borderlands"

(1868), Katkov's articles caused sensations. Under the influence of the concept of "German intrigue," being suspicious of the "Germanization" of Baltic Germans, Russian publicity inclined to sympathize with the Russian nationalistic discourse. In this sense, it is possible to say that Katkov's journalistic activities played the important role in the authorization of the legitimacy of Russian rule in Baltic region.

Key Words: Mikhail Katkov, political nationalism, unity in diversity, theory of Russian statehood, Baltic German (Ostsee) question

#### はじめに：本稿の問題意識とカトコフ研究の現在

近年のロシアは、いつになくミハイル・ニキフォロヴィッチ・カトコフ（1818～1887）への関心が高まっていると言わざるを得ない。ロシアで保守主義思想に関心が集まり始めたのは1990年代後半からといわれているが<sup>1</sup>、その頃から今日に至るまで、カトコフは特に注目されている思想家の一人である。ソ連時代、カトコフの著作は一度も出版されなかった。しかし、21世紀に入り、何種類かの論文集や著作集<sup>2</sup>が刊行されるようになった。2010～12年には、その決定版というべき全6巻の『著作集』<sup>3</sup>も刊行された。

また、研究も非常に活発に行われている。カトコフ研究は帝政時代、ソ連時代においても一定の蓄積があるが、近年のカトコフ研究の進展ぶりは瞠目すべきものがあり、数多くの論文、著作が刊行されている<sup>4</sup>。ソ連崩壊以降、「カトコフ」を主題とする学位論文の数は、少なくとも13件ほどある<sup>5</sup>。これはカトコフと並び称される同時代の保守主義者に関する学位論文と比較しても、相対的に多い<sup>6</sup>。また、歴史学、文学、哲学、教育学、政治学、法学など、様々な専攻の研究者から関心を向けられていることも特筆すべきであろう。研究状況全体を俯瞰的に要約すれば、ロシア帝国論の隆盛を背景として、彼のロシア・ナショナリズム（российский национализм）、ポーランド人問題をめぐる言論活動等を中心に、様々な関心と方向性の研究が活発に行われているといえよう。

上のような学問状況から読みとれるのは、ソ連崩壊から今日に至るまで、「ロシア国民（российская нация）」をいかに定義するかという問題が切実であり続けているということである。例えば、現代ロシアの研究者あるいは為政者のなかに、「多様性の中の統合」というヨーロッパ連合の有名なスローガンをロシアの問題として認識し、その実現の可能性と方法を模索する動きがある。それはロシア連邦を構成する多彩なエトノス集団の総体を「ロシア人」と位置付けるための理論的模索である<sup>7</sup>。本稿で示すように、カトコフの言動も、まさにこの模索に向けられていたのであった。そして今日カトコフの思想が注目されているとすれば、少なからぬ現代ロシアの人文社会科学系の研究者がカトコフに問題を解く鍵を見出そうしているということである。また、グローバル化する世界あるいは帝國的状況を背景として、従来の諸概念と学問的枠組みの見直しが迫られる中で、国家、国民、民族、ナショナリズムなどの諸概念を再検討し、現状を理解し、将来のロシア像、あるいは世界像を構想するための手掛かりとしてカトコフが必要とされているということである。

例えばミハイル・マナコフの論文「国家安全保障における政治ジャーナリズムの役割（1860年代カトコフの思想体系）」（2013）<sup>8</sup>では、クリミア戦争での敗北とソ連崩壊、1860年代のポーランド反乱と1990年代のチェチェン紛争が対置されている。これは、現代の「国民アイデンティティの危機」、「外国人嫌悪に代表される排外主義」といった問題解決の手掛かりを、1860年代

## 広域共生をめざす政治的ナショナリズム

のカトコフに求めようとする著者の姿勢の現れと見なすことができよう。マナコフは、カトコフは当時のロシア社会に蔓延していた「ニヒリズム的懐疑」と「国民的自虐」が問題の根源であると喝破し、言論活動を通じて、それら病理的な傾向に抵抗し、社会に警告していたと結論している<sup>9</sup>。また、近年精力的にカトコフを始めとするロシア保守主義に関する著書と論文を発表し続けているスヴェトラナ・サニコワも、カトコフへの関心の高まりがペレストロイカ以降に生じた社会生活の不安定化という文脈の中で起ったという点を強調している<sup>10</sup>。この両者の研究を始めとして、現代ロシアの学界でカトコフは、いわば「危機の時代の思想家」として再評価されつつあるようなのである。

しかし、過去の研究動向にある程度通じている者にとって、カトコフへの関心の高まりという現象は必ずしもわかりやすいものではない。というのは、彼は自身の新聞『モスクワ報知』等に、ありとあらゆる問題について、膨大な数の論説を書き散らしたジャーナリストであり、特に代表作といえるものはなく、彼の思想の核心を捉えるのは困難極まりないことであり、何が現代の研究者を引き付けているのかが判然としないからである。また、思想家としてのカトコフの対しては、古くから否定的な評価が定着している。例えば、ハーヴァード大学におけるロシア研究の基盤を築いたことで知られるミハイル・カルポヴィッチは、『ロシア精神史講義』（1958）において、「（カトコフが）思想家と呼ぶに値するとは思えない。また、彼がロシア精神史で扱われるべき人物とも思えない。彼はロシアの政治史とジャーナリズム史において対象とされるべき人物である」<sup>11</sup>と述べている。同じく著名なロシア精神史家であるトマーシュ・マサリクも、「カトコフは、非常にしばしば自分の意見を変えた。彼は決して、堅固な性格と明確な目的をもった政治家ではなかった。〔……〕彼には、鍛えられた保守的世界観が欠けていた」<sup>12</sup>と述べて、カトコフの首尾一貫性のなさ、中途半端さを指摘している。

思想家としての意義は疑問視されてきたが、実務家、政治的人物としてのカトコフの役割は、研究者に注目されてきた。例えば、セルゲイ・イサーコフのバルト・ドイツ人をめぐる言論戦に関する著書では、反バルト・ドイツ人の世論形成におけるカトコフの役割が論じられている<sup>13</sup>。1978年に発表されたヴァレンティナ・トヴァルドフスカヤのモノグラフでは、自ら創り出した世論によって政府に影響を与えていたという19世紀後半のカトコフの巨大な影響力が明らかにされている<sup>14</sup>。また、欧米の研究者では、マルク・ラエフ、エドワード・ターデン、マーチン・カツ、カレル・ダーマンらがそれぞれカトコフについて論じたことがあるが、彼らにしても、あくまでも歴史的な関心から、帝政の政治的实力者としてのカトコフに関心を向けてきたのである<sup>15</sup>。

本稿は、なぜ現代ロシアでカトコフが研究者の関心を惹いているのかという問題を念頭に置きつつ、カトコフのナショナリズムの核心を明らかにしようとするものである。1850年代から60年代にかけて、「ポーランド人問題」「ウクライナ問題」「バルト・ドイツ人問題」といった分離主義（もしくは潜在的分離主義）、社会生活、国家生活の根源的な破壊の原理であるニヒリズム、社会の圧倒的多数派を構成する農民などが問題化するなか、「ロシア」自体の統合ないしは連帯を担保する原理や民族的アイデンティティが問われるようになった。カトコフのナショナリズムとは、この国家と民族の危機的状況に瀕したロシアの公衆に向けられた問題提起という形で具現化したのであった。カトコフが「危機の時代の思想家」として現代に甦ったとすれば、1860年代の彼のナショナリズムの本質に迫ることで、現代ロシアの研究者が彼に関心を抱く事情や背景が理解しやすくなるはずである。

本稿では、そのカトコフのナショナリズムが、「広域共生をめざす政治的ナショナリズム」

というべきものであり、それがポーランド人問題を始めとする分離主義的傾向の疑いのある民族的集団が社会問題化するという国家的危機に対する彼なりの答えであったことを論証していく。そして、1860年代のロシア・ナショナリズムの昂揚の背景には、カトコフ的なナショナリズム概念なくしてはありえなかったことを明らかにする。本稿でいう「政治的ナショナリズム」は、言語、習慣、「血」などの文化的紐帯を基盤とするナショナリズムとは異なり、文化的要素に対して価値中立的な国家を中心とする政治的統合をめざすナショナリズムをさす。

ただし、カトコフのように、広範な分野で言論活動を展開し、夥しい数の論説を残したジャーナリストの思想を分析しようとするれば、分析範囲を限定せざるを得ない。本稿では、1860年代後半に彼が主導的な役割を担ったバルト・ドイツ人（オストゼイ）問題における言論活動に限定する。その理由は、バルト・ドイツ人の問題化過程におけるジャーナリズムの役割の大きさ、そしてそのジャーナリズムにおけるカトコフの存在の大きさに求められる。19世紀半ばまで彼らを批判することはタブー視されていたが<sup>16</sup>、1860年代に入ってからジャーナリズムが積極的にとりあげたことで、ロシアの公衆に問題が認知されるようになった。また、後で述べるように、この問題をめぐってはロシア側とバルト・ドイツ側のジャーナリズムが「出版戦争」と呼ばれるほどの激しい言論戦を展開し、ロシア政府がロシア系住民とドイツ系住民のナショナリスティックな衝突を危惧するほど、危機的な状況がもたらされた<sup>17</sup>。それゆえ中央政府もこの「出版戦争」の動向を見守らざるを得なくなっていた<sup>18</sup>。最終的に1870年代初頭には急速に論戦は収束するのだが、「出版戦争」は言論が社会を動かした一例であり、この渦中で中心的な役割を担っていたのがカトコフであった。

ここで重要なのは、彼が明らかにジャーナリスト以上の存在であったことである。カトコフの回想を書いたエヴゲーニー・フェオクチストフは、次のように述べた。「彼のことを世論の代弁者だったというだけでは言葉不足である。世論を創っていたのが彼であり、世論の方が彼の後を追って出てこざるを得なかったのである」<sup>19</sup>。そして前述のトヴァルドフスカヤらが明らかにしてきたように、カトコフが権力の外部にいながらにして、実質的に権力機構の一翼を担う存在であった以上<sup>20</sup>、彼の「出版戦争」における「政治的」影響力の意味は看過できない。バルト海沿岸地方をめぐる「出版戦争」は、「政治的主体」としてのカトコフを理解する上で格好の題材だということができよう。本稿は、バルト・ドイツ人問題を通じて、カトコフのナショナリズムの基本概念を明らかにする試みである。

具体的には、次のような順序で論じる。まず、先行研究において、カトコフのナショナリズムがどのように理解されてきたのかを検証する。そしてバルト海沿岸地方に関するカトコフの言動を分析し、彼の論戦における立場、問題に対する視角を明らかにする。最後に、1870年代初頭に「出版戦争」が収束した後のロシアとバルト海沿岸地方に何が残ったかについて検討し、カトコフの言論活動と政治的ナショナリズムの意義について考察する。

### Ⅰ 近年の研究に見るカトコフのナショナリズム

前述のように、カトコフへの関心が高まっている背景として、ロシア帝国論の隆盛は無視できない。まずこの研究潮流のなかでカトコフがどのように評価されているのかについて言及したい。

従来、欧米のカトコフ研究では、彼のナショナリズムもいわゆるコーン・ダイコトミーに代表される「西欧＝先進的、合理的」「東欧ロシア＝後進的、非合理的」という西欧中心主義的価値観が投影された概念的枠組みを通じて理解されてきた。また、比較的近年においても、カトコフもスラヴ主義者も十把一絡げにし、彼らのナショナリズムを「パン・スラヴ主義」として一括

## 広域共生をめざす政治的ナショナリズム

する傾向が一部の研究者に見られるが<sup>21</sup>、これもコーン・ダイコトミーを引きずった一例と見なすことができよう。そのような概念的枠組みによれば、ポーランド反乱の徹底的な鎮圧を主張するような人物は、どうてい「西欧的」あるいは「合理的」なナショナリストとはいえず、畢竟、否定的に評価されてしまう。

しかし、帝国論的な視角によってナショナリズムを捉え直すと、それまでとは違ったカトコフ評価が出てくる。ここでは、ロシア帝国における西欧とは違ったナショナリズムのあり方が注目され、「ルーシ・ナショナリズム (русский национализм)」と「ロシア・ナショナリズム (российский национализм)」の違いが強調され、後者の形成に対するカトコフの理論的貢献が指摘されているのである。例えば、ロシア帝国論の代表的研究者であるアンドレアス・カペラーは、カトコフが「民衆」を基盤とする後者を、イワン・アクサーコフは「ルーシ」というエトノス概念にもとづく前者を発展させたとは指摘する<sup>22</sup>。また、同じく著名なロシア帝国研究者であるアンドレアス・レンナーも、スラヴ主義者の「ロシア帝国」がエトノス概念であったのに対し、「ナロードノスチ」概念を帝国の改革に資する概念として政治的綱領に組み込んだ<sup>23</sup>として、カトコフを肯定的に評価した。このように、帝国論的アプローチに立つ研究によれば、カトコフとは、帝国という国家形態に相応しいロシア国民イデオロギーの創作者なのである。

他方ロシアでは、1980年代から90年代の民主化と自由化の時代には、急進改革派的な立場の人々を中心に、1970年代までの否定的なカトコフ評価に立ち戻る人がいたというが<sup>24</sup>、民主化と自由化の功罪両面が知れ渡った現在では、リベラルな保守主義という部分を重視していた革命前のカトコフ研究とその継承者のように、彼のナショナリズムの国家主義的コンセプトを重視する研究者が目立つようになっている。前述のサニコワ、アレクサンドル・シリニャンツ、アンドレイ・テスリヤ、ヴァチェスラフ・クドリャシェフらの研究<sup>25</sup>がその典型だが、彼らは、カトコフのナショナリズムを「国家ナショナリズム (государственный национализм)」または「公民ナショナリズム (гражданский национализм)」と定義した。そして、ルーシというエトノスを紐帯とする「ユートピア的ロシア」<sup>26</sup>を想像したスラヴ主義者のナショナリズムとは区別される、「現実的ロシア」<sup>27</sup>のナショナリズムの主導者として、カトコフを肯定的に評価している。

このような彼らの理解の前提となっているのは、今日「ロシア国家論 (теория российской государственности)」と呼ばれ、カトコフが1860年代半ばに提起し、広めた国家論である。報告者が調べた限り、カトコフが自説をそのように名付けた形跡は見当たらない。また、それについて体系的に論じた彼の著作も見当たらないが、事典類では、次のように説明されている。

この理論によれば、国家の根幹を成しているのは国家的民族性の統一に基づく一体性である。民族性とは、カトコフによれば、きわめて国家的な概念である。つまり、種族的なルーツ、言語、歴史的に培われた性格の特徴、道徳、習慣、宗教は、ここでは何の役割も担っていない。一つの歴史的に前進した種族が国家の基礎を成し、国家的統合の名のもとに周辺の他の種族を自身に従わせる。このような種族が国家的民族と呼ばれ、主にこの民族によって支配が確立される<sup>28</sup>。

この理論の特徴は、国家または公民から民族 (национальность) 以外の要素が概念的に排除されている点にある。国家は人種的出自、言語、歴史的に育まれた「国民性」「民族性」などと呼ばれる住民の特性、道徳、慣習、宗教など、様々な精神的・文化的要素と結びつけられることが多いが、カトコフはこれらを国家から切り離す。そしてそれらとは区別される民族の「国家的意義」を、1864年11月18日付の『モスクワ報知』で説明している。

ある集合的要素を民族として承認するというは、彼らに自分らしい生き方や信仰などを許すということでは全くない。[……] 民族としての承認は、彼らに自由を許与することではなく、権力を与え、強制力を与えることなのである。ある民族の承認によって解決するのは、権力、政府、国家に関する問題である<sup>29</sup> [強調 — 引用者]。

このように、カトコフは民族を文化的概念ではなく、政治的概念に位置づける。つまり、民族とは国家を構成できる種族のことであり、国家を構成した民族が国家的民族 (государственная нация) なのである。言い換えれば、国家を構成できない種族は、民族とはいえないということでもある。そして国家的民族は、周辺の民族ならぬ種族を「国家統一」の名の元に自身に従わせることになる。それゆえに、一つの国家の中で国家的民族が共生することは、論理的にあり得ない。カトコフの国家論によれば、国家とは、多様な種族を包摂することで広域にわたる文化的共生を実現しながら、国家的民族を中心に構成された一元的統合体といわねばならない。だから彼は、「支配的要素の運命が、その発展如何が、全体の運命を左右するのである」<sup>30</sup> と述べたのである。

カトコフの国家論は、一見「抑圧的」なようだが、それは一面的な見方というものである。なぜなら、国家という「支配装置」から精神的・文化的要素を切り離すということは、国家的民族による他の種族の文化的、精神的な支配と同化の強制を正当化しないということだからである。つまり、カトコフの論理によれば、国家的民族以外の「民族」が問題となるのは、その「民族」の国家に対する忠誠が定かでない場合、あるいは「民族」を新たに構成し、国家的民族を目指す動きが見られる場合ということになる。彼は「国民的統合は画一的なものではない」<sup>31</sup> とも述べているが、これは国家としての統合は、あくまでも政治的次元に属する問題であって、文化的多様性とは全く矛盾するものではないという意味である。つまり、カトコフは、文化的同質性を前提とした西欧の国民国家的な統合とは異なり、多様な要素を包み込む、いわば広域共生をめざすナショナリズムを提唱した思想家だったとすることができる。ただし、この論理には様々な問題がある。この点に関しては、後述する。

このように、カトコフのロシア国家論は、多様な民族、文化、言語、宗教を含む広大な領域においてロシア国家の統合性を維持していくための試論である。カトコフのナショナリズムは、ロシアという広大かつ多様な空間に適合した広域共生論の一つとして、現代の研究者によって高く評価されているといえよう。また、ソ連社会の特徴の一つが「文化的同質性への強い指向」<sup>32</sup> だったことを想起すれば、文化的な多様性を擁護しつつ、国家の統合をも強化するという論理を呈示したカトコフがソ連崩壊後に注目されるようになったのは、ある意味当然であろう。

## II バルト・ドイツ人問題をめぐる「出版戦争」におけるカトコフの役割

バルト海沿岸地方に関する議論が活発に行われたのは 1860 年代半ばから後半にかけてのことである。この問題は、前述のように、長らく公で議論すること自体タブー視されていた。それが 1860 年代になって活発に議論されるようになったのには、いくつかの背景がある。1863～64 年のポーランド反乱に代表されるロシア帝国内の「民族」問題がロシア人の意識に浮上したこと、事後検閲が導入されたことで、比較的自由な言論活動が可能になったこと、1862 年にドイツ統一を主張するビスマルクがプロイセン首相に就き、バルト・ドイツ人の「分離主義」が疑われるようになったことなどが挙げられる。

しかし、バルト・ドイツ人の「分離主義」なるものは、少なくとも 1860 年代半ばの時点では、その実質的な社会的意味は疑わしい。ドイツ本国でドイツ統一が叫ばれたからといって、それが

## 広域共生をめざす政治的ナショナリズム

ただちにバルト・ドイツ人の共感を得て、「分離主義」とドイツとの結合が唱えられたわけではないということである。また、ドイツ統一を掲げたビスマルク自身、バルト海沿岸地方を統一ドイツに組み入れる考えはなかった<sup>33</sup>。ミハイル・マシュキンによれば、ビスマルクにとって同地方の問題はロシアの国内問題であり、ロシア政府が同地域を「ロシア化」したとしても、それはロシア政府にとって当然の行動であった。また、彼においては、拡張主義によって得られるバルト海沿岸地方より、損なわれる平和の方が重要であった。さらに彼は、ドイツ本国とバルト海沿岸地方の「ドイツ性 (Deutschtum)」との繋がりを一貫して否定していた<sup>34</sup>。

確かに 1860 年代は、ロシア政府もバルト・ドイツ人の特権を手放しで肯定できるような時代ではなくなっていた。かといって、ロシア政府が彼らの特権と地域的特性を一挙に剥奪しなければならないような状況にもなかった。また、バルト・ドイツ人のラトヴィア人、エストニア人に対する経済的、文化的、政治的優位性は揺らいでいなかった。その意味では、この時期のバルト・ドイツ人の多数派は、ドイツとの統合を本気で目指す急進的な分離主義に惹きつけられる理由がなかったと言わなければならない。当時のバルト・ドイツ人の「分離主義」の実態を理解するには、次の、リフランド県憲兵隊所属のある佐官（氏名不詳）が 1864 年 12 月に書いた報告書が参考になる。

私も分離主義が存在しないとは言わない。それどころか、名誉にかけて何度となくそれについて報告してきた。しかし、幾多の観察によって確信したのは、それが疫病と同じようなものだということである。つまり、ドイツの諸国民の生活状況や諸国家で起る出来事を見ては、止んだり強くなったりするのである。要するに、シュレースヴィヒ＝ホルシュタイン問題のときにドイツ人は熱狂主義に憑かれたが、少し遅れて我がバルト・ドイツ人においても、分離主義的な願望がぶり返したということである<sup>35</sup> [強調 — 引用者]。

要するに、バルト・ドイツ人の「分離主義」なるものは、その時々的情勢によって左右される移ろいやすいものにすぎず、それ自体は深刻に捉えるべきものではないということである。1860 年代の「出版戦争」について論じたセルゲイ・イサーコフによれば、バルト海沿岸地方に関して、ロシアの定期刊行物において論じられていた主要問題は分離主義ではなく、エストニア人、ラトヴィア人農民の窮状であった。そして分離主義がロシアで本格的に論じられるようになったのは、1866 年から 1868 年にかけてであったという<sup>36</sup>。これと関連して、イサーコフは「バルト・ドイツ人の特殊な体制、分離主義がロシアの国家統合にとってさらに危険なものになったのは、バルト・ドイツ人があからさまにプロイセンに接近したためである」<sup>37</sup>とも述べているが、バルト・ドイツ人がプロイセンとの統合を急ぐ理由が見当たらないこと、当のプロイセン首相にバルト・ドイツ人との統合を推し進める考えがなかったことを考慮すると、この見解は一面的と言わざるを得ない。

他方、件の佐官は、『モスクワ報知』等の新聞による攻撃が「バルト・ドイツ人を動揺させ、彼らとロシア人との友好関係に悪影響を与えている」<sup>38</sup>と書き加え、カトコフらを批判している。つまり、彼の見立てでは、バルト海沿岸地方で分離主義が深刻化しているとすれば、その真の原因は、カトコフを中心とするロシアのジャーナリズムだということになる。「世論を創るジャーナリスト」という後の評価を想起すると、「出版戦争」の開始時期とされる 1864 年の時点で、このような見方があったことは注目に値する。また、前述の 1867 年 10 月の内務省文書〔注 12〕が示すように、論戦の高まりが世論を揺るがし、ロシアとドイツのナショナリズム同士の衝突が生じかねない事態に発展していった「出版戦争」の展開を想起すると、この佐官の見解には

## 山本 健三

一定の妥当性があるといわねばならない。

ところで、カトコーフがバルト海沿岸地方に関して論じた重要な主題の一つは、この地方の「ゲルマン化」である。1864年5月16日付の『モスクワ報知』紙上でカトコーフは、ルター派地方総監ワルターがバルト海沿岸地方の「ドイツ的性格」とエストニア人とラトヴィア人の「ゲルマン化」に執着しているとして、その動向を批判した。しかしそれは、彼がドイツの影響の大きさそのものを否定しなかったということではない。ここでカトコーフがこだわっていたのは、いくらドイツ系住民が支配階層を構成していようとも、彼らがあたかもドイツ・ナショナリズムの主体であるかのような言説は許されない、ということである。例えば、次のように述べている。

リフランド〔バルト諸県の一つ―引用者〕は、他のバルト地方と同様に、ドイツ的な地方とは呼べない。なぜならそこでのドイツ的なものは、騎士道や都市の諸階層に見られるにすぎないからだ。この地方でドイツ民族（немецкая нация）に関する話は出てこないし、ありえない。〔……〕沿バルト海諸県では、ドイツ的要素がドイツ民族であったことなど、一度もない。そこではドイツ的要素とは上流階層とドイツ語会話のことにすぎない<sup>39</sup>。

前述のように、一つの国家に国家的民族は一つだけである。つまり、その国家的民族だけがその国家内で唯一のナショナリズムの主体であり得るということであり、それ以外の種族が自分たちの文化的影響力の拡大を進めるような言説は、国家的民族への挑戦となりうるのである。そしてそのような言説がはびこるような状況になったとき、それは分離主義といわねばならない。カトコーフのバルト・ドイツ人批判も、ドイツ的要素の拡大という事態に対してのみならず、分離主義というべき状況に対して向けられるようになった。カトコーフは、1865年5月12日付の『モスクワ報知』で外国ジャーナリズムのバルト海沿岸地方に関する論調を批判しているが、それはまさに同地方の問題がドイツ人を主体とする分離主義として扱われていることに対して向けられたのである。

ロシアのドイツ系住民に対して、我々は一度たりとも攻撃したことがない。〔……〕いわゆるバルト・ドイツ人問題なるものは、全く別の要因から発生したのである。それはモスクワやペテルブルクではなく、バルト・ドイツ人の定期刊行物から発生したのである<sup>40</sup>。

ここでカトコーフは、バルト・ドイツ人の生活は平穏に守られているにもかかわらず、バルト・ドイツ系ジャーナリズムが民族問題としてのバルト・ドイツ人問題、分離主義を「捏造」するために国外で宣伝活動を行っている可能性を指摘している。そしてそれを「真実」として断じたのが、外国での宣伝工作に積極的な新聞の一つだという『リガ新聞』に対する批判を書き立てた1865年12月24日付の『モスクワ報知』の論説である。

『リガ新聞』は、バルト海沿岸地方の住民のある部分をドイツ民族として、ロシア人から分離させるだけでなく、敵対させようとしているのだ<sup>41</sup>。

上で紹介したイサーコフの指摘通り、1860年代半ば頃から、カトコーフを始めとするジャーナリストたちは、バルト・ドイツ人の分離主義を問題とするようになった。ただし、上の引用部分でカトコーフが「分離主義」の責任をバルト・ドイツ系ジャーナリズムに押しつけることで、分離主義が実体として存在するかのような書き方を避けたように、その言い回しには慎重さが窺



## 広域共生をめざす政治的ナショナリズム

える。カトコフ以外のロシア・ジャーナリズムの代表的論客イワン・アクサーコフも、1868年7月21日付の『モスクワ』で次のように述べて、あくまでもバルト・ドイツ系ジャーナリズムの宣伝のせいでドイツ・ナショナリズムが問題として浮上しようとしていると主張した。

ドイツ系各紙は間断なくバルト・ドイツ人をゲルマン民族 (германская национальность) の闘士に見せかけようとしている。これは本当なのか。現在の重要かつ生死にかかわる問題、すなわち農民問題をめぐる闘争では何が語られているのだろうか。まさかゲルマン民族という理念から農民の奴隷化や領地を要求しているのだろうか<sup>42</sup> [強調 — 引用者]。

このように、1860年代半ばから後半にかけての時期には、カトコフもアクサーコフも、バルト海沿岸地方における「ドイツ民族を主体とする分離主義の存在」が、直接的な表現は避けたものの、バルト・ドイツ系ジャーナリズムの力で「捏造」されつつあると主張したのである。つまり、実体がどうであったかに関係なく、「ドイツ人問題 (民族問題) としてのバルト・ドイツ人問題」が1860年代後半ロシアの新聞紙上で創られたのである。そしてこの「ドイツ人問題としてのバルト・ドイツ人問題」を象徴する出来事が、1868年8月、プラハにおけるサマーリンの『ロシアの辺境』第一分冊の出版である。この書は、後の研究者がバルト・ドイツ人問題のクライマックス的な「事件」<sup>43</sup>と位置づけるほど、ロシアおよびバルト海沿岸地方で多大な反響を引き起こした。

サマーリンは、内務官僚としてリガに勤務した際に現地で知ったラトヴィア人、エストニア人農民の窮状、ルター派から正教に改宗した人々の苦境、バルト・ドイツ人の特権に阻まれて自由な商業活動もままならないロシア系住民の困窮、そうした状況を看過するロシア政府関係者など、バルト海沿岸地方の状況に衝撃を受け、1848年12月、『リガからの手紙』という著述をものし、身近にいた貴族や官僚に「真実」を知らしめようとしたことがあるという、いふなればバルト・ドイツ人問題の先駆者である。しかし、この『リガからの手紙』はニコライ一世の目にも触れることになり、1849年3月、サマーリンは逮捕され、ペトロパヴロフスク要塞に12日間拘留された。そして解放の直前、ニコライ一世はサマーリンに接見し、直々に説教した。この説教の模様を記したメモによれば、ニコライ一世は『リガからの手紙』で示された見解を「バルト・ドイツ人のロシア化」論と見なし、デカブリストの反乱に匹敵する反逆行為として、サマーリンを非難したという<sup>44</sup>。

この一件以来、サマーリンはバルト海沿岸地方に関して沈黙を守っていたが、1867年3月、アクサーコフの新聞『モスクワ』に「沿バルト諸県における正教について」と『通信 (Весть)』紙の政治的理想について」という2本の論文を掲載した。サマーリンが再びこの問題に関して口を開いたきっかけは、1864年に伝わってきた、1840年代に正教に改宗したラトヴィア人がプロテスタントへの再改宗を求める運動が起きたという情報であったという<sup>45</sup>。彼は1840年代の正教改宗運動の「純粋さ」を確信していた分、再改宗の報に大きな衝撃を受けたのである。一本目の論文では、その真相を確かめる必要性を訴えている<sup>46</sup>。そしてもう一方の論文では、親バルト・ドイツ的な貴族<sup>47</sup>が支援していた貴族階層の代弁者的新聞である『通信』紙の国家観を、「民族不在」<sup>48</sup>であると批判した。サマーリンによれば、その国家観は、「ロシア帝国の中心をなす民族はロシア人である」という理念が欠如しているという。

バルト・ドイツ系ジャーナリズムによる「バルト・ドイツ人問題」の「ドイツ人問題」化という、カトコフ、アクサーコフらの認識を引き継ぎながら、1867年の論考を発展させたといえるのが、『ロシアの辺境』である。この著作の内容は多岐にわたるが、カトコフらが主導してきた

「出版戦争」の展開上、最も重要な点は、「バルト・ドイツ人の陰謀」ならぬ「ドイツ人の陰謀（немецкая интрига）」として具現化する、バルト・ドイツ人の「民族的野望」の存在が指摘されたことである。「この地方の信仰は、ドイツ人の陰謀によって買収され、暗示を吹きこまれた不純な思い込みによって確立され、暴力によって支えられてきた」<sup>49</sup>という指摘を始めとして、サマーリンは、「煽動（агитация）」、「陰謀（заговор; интрига; происки）」、「奸計（козни）」といった挑発的な用語を駆使しながら、バルト海沿岸地方の諸問題の背景にあるという「真実＝ドイツ人の陰謀」の存在を描き出した。

さらにサマーリンは、バルト・ドイツ人が1860年代に入って「意識のなかで自覚」<sup>50</sup>したという「行動綱領」の存在を指摘する。それは「バルト海沿岸地方をドイツのために守らなければならない。そのためにはよき時代の到来を待望しつつ、中世的な社会制度のもとでロシア社会から完全に分離し、地域を支えなければならない」<sup>51</sup>というものである。またこの「綱領」を実現するための「3つの課題」をも指摘する。それは第一に「エストニア人とラトヴィア人のドイツ化」、第二に「バルト・ドイツ人社会の団結」であった<sup>52</sup>。そして最後は、「ロシア政府によるドイツ民族の承認」であった。3つ目の課題は、サマーリンが最も深刻に捉えたもので、その説明部分には、バルト海沿岸地方の特権的ドイツ系住民でしかないはずの「バルト・ドイツ人（остзейцы）」という概念が「ナショナリスティック」な意味を帯びて来ているのではないかという、バルト・ドイツ人を批判するロシア系ジャーナリストたちの問題認識がよく反映されている。

この課題は、いわば地方的ゲルマン主義（провинциальный германизм）を身分的特権の古い、損傷した器から、将来予想される衝突に耐えうるより丈夫な素材からつくった器に移し替えるということである。言い換えれば、政府に気付かれないように、バルト・ゲルマン主義（балтийский германизм）を政治的民族性（политическая национальность）として政府に承認させることである<sup>53</sup>。

ロシア政府は、『ロシアの辺境』のロシアでの出版を認めなかった。しかし、その内容は、断片的ながら、ロシアの読者に伝えられることになった。様々な定期刊行物において、『ロシアの辺境』が部分的に引用され、その内容が紹介されたからである。紹介に最も積極的だったのはアクサーコフの『モスクワ』紙である。同紙は1868年9月から10月にかけて、7度にわたって『ロシアの辺境』を絶賛する紹介論文を掲載した。そこには、例えば、次のような評価が見られる。

著者〔サマーリンー引用者〕は、バルト海沿岸地方とロシアの関係を弱めようとする、人為的に連結した奸計と陰謀のすべてを暴き、他方では、我が国の行政と社会が犯した過ちと失策、さらにロシアの国民的利益に反する文字通りの罪を暴き、長大なリストを示しながら、ロシアが担うべき責任と使命に気付かせてくれる<sup>54</sup>。

このように、アクサーコフは『ロシアの辺境』が主張する「陰謀」の存在に同意し、それを「暴露」したサマーリンを高く評価した。しかし、同紙は1869年4月、この時の紹介論文を含むバルト・ドイツ人問題に関する論調全般が問題視され、廃刊の憂き目に遭った<sup>55</sup>。

他方、カトコフの『モスクワ報知』紙も積極的に『ロシアの辺境』を紹介した。1868年8月から9月にかけて、4度にわたって『ロシアの辺境』の紹介論文を掲載した。彼もアクサーコフ同様、サマーリンを高く評価しながら、内容を紹介した。その中の一つで、彼は次のように述べた。

## 広域共生をめざす政治的ナショナリズム

同書『ロシアの辺境』—引用者）は、この上ない詳細さで、ポーランド人の陰謀とは比較にならないほど危険で如才ない陰謀を暴き出している。これがめざましい成功を収めながら進行し、思いつく限りの反ロシア的な諸要素と通じているのは明らかである<sup>56</sup>。

サマーリン氏は、ロシアの法律に反対するキャンペーンだけでなく、我が国でポーランド人と手を組んだドイツ人の煽動が進行していることをこの上ない明瞭さで論証したのである<sup>57</sup>。

カトコフも「陰謀」の摘発という部分に関して、『ロシアの辺境』を高く評価したが、彼の評で注目すべき点は、「ポーランド人の陰謀」との「関連」の指摘を評価していることである。サマーリンがその「関連」について述べた箇所は、例えば、次の部分である。

国外でのバルト地方に関する煽動についていえば、私はドイツ人のプロパガンダとポーランド人のプロパガンダの間で結ばれた緊密な連携に注目せずにはいられない。プロイセンでは、最初にポズナニのポーランド人が表面上虐げられているバルト・ドイツ人のために声をあげてから、新聞紙上では先回りしてルター派とドイツ民族を待ち受ける不幸な運命を嘆き続けているようだ<sup>58</sup> [強調—引用者]。

1863年のポーランド反乱勃発以来、カトコフは「ポーランド人の陰謀」を痛烈に批判した。レオニード・ゴリゾントフによれば、ロシア帝国を揺るがす「致命的問題」<sup>59</sup>が各地で析出され、一種のコード化が可能になったのは、カトコフの功績である<sup>60</sup>。確かに彼は、西部諸県のウクライナ人とベラルーシ人の民族運動が発生した問題の背後に「ポーランド人の陰謀」があると喧伝したのを嚆矢として、分離主義あるいは破壊主義が疑われる動向を「ポーランド人の陰謀」の影響と関連づけていった。そして「ポーランド人の陰謀」と「ドイツ人の陰謀」の「関連」についても、彼は、『ロシアの辺境』出版よりも早い時期（1868年1月）に、次のように断言していた。

ロシアのバルト海沿岸地方で、ポーランド人が不満を喚起しようと精力的に活動し、その境界でまるでドイツ民族（немецкая национальность）を庇護するかのよう、多くの不快なことを仕出かしているのは、我々にも明らかなことである。おそらく、この世界史的な無秩序の張本人の陰謀なくして、それが我々の耳に届くことはなかっただろう<sup>61</sup>。

「ポーランド人の陰謀」にかなりこだわった言論活動を繰り広げてきたカトコフにとって、『ロシアの辺境』は、持論の正当性を裏付ける書物となった。カトコフは、アクサーコフとともに同書を大々的に宣伝することで、「ドイツ人問題としてのバルト・ドイツ人問題」と「その背後に潜む「ポーランド人の陰謀」と「ドイツ人の陰謀」の結託」という、バルト海沿岸地方の「真実」をロシアの読者に伝えようとしたのであった。既に述べたように、研究者はしばしば『ロシアの辺境』の出版をバルト・ドイツ人問題に関する論戦の絶頂期と位置づけるのだが、同書の核心的コンセプトが「陰謀」であるという意味では、カトコフの存在意義が極めて大きかったといわねばならない。彼こそ、「民族的陰謀」というコンセプトの原型を準備し、それが人口に膾炙する素地を整えたジャーナリストだったからである。

以上より、カトコフの「出版戦争」における役割とは、次のようなものだといえるだろう。すなわち、彼は、精力的にバルト海沿岸地方の問題を新聞で扱い、ロシア社会に知らしめただけ

でなく、「ポーランド人の陰謀」とバルト・ドイツ人問題を結びつけ、バルト海沿岸地方に政治的民族としてのドイツ民族の承認を目論む「ドイツ人の陰謀」があるという主張が受け入れやすい状況をつくりだし、バルト・ドイツ人問題の民族問題化を促進する牽引役を担っていたのである。そして、些か逆説的であるが、次節で見るように、カトコフはドイツ・ナショナリズムを煽ることで、ロシア・ナショナリズムの強化に成功するのである。

### III 「出版戦争」後のロシア・ナショナリズム

「出版戦争」は1860年代末に過熱化したものの、1870年代に入ると、急速に収束に向かった。バルト・ドイツ人問題で定期刊行物が盛り上がった時代は、1871年までにほぼ終わってしまう。その後も70年代を通じて、この問題で論壇が活況を呈することはなかったのである。本節では、「出版戦争」によって何がもたらされたのか、それはその後のロシアとバルト・ドイツ人にとって、どのような意味をもっていたのかについて検討し、バルト・ドイツ人問題をめぐる論戦におけるカトコフの言論活動のインパクトを考察する。

まず、1868年の『ロシアの辺境』以降の「出版戦争」の展開を確認しておきたい。論戦の激しさは、翌年、翌々年も衰えなかった。例えば、1869年、『モスクワ報知』では32本ものバルト・ドイツ人関連の論説が掲載された。これは1865年の33本に次いで、2番目の数字である。そして1870年も25本であった。

定期刊行物上での論戦の他に、1869年にはカール・シレン、ヴォルデマール・ボック、ユリウス・エッカートといった代表的なバルト・ドイツ系知識人がサマーリン批判の書を上梓している<sup>62</sup>。とりわけ物議をかましたのが、1869年5月ライプチヒで出版された、シレンの『サマーリン氏に対するリフランド人の返答』である。同書はただちにロシアで発禁本となり、シレン自身も勤めていたデルフト大学の教授職を失った。またリフランドを去り、ドレスデンに移住した<sup>63</sup>。当時のロシア政府の関係者には、彼の著書が、『ロシアの辺境』と同様、ロシア人とバルト・ドイツ人の間に深刻な反目をもたらすと考えられたのである<sup>64</sup>。しかし、サマーリンとシレンの著作はともに発禁だったとはいえ、ロシアの公衆はそれらの内容を知ることが可能であった。同年、ミハイル・ポゴーチンのシレン批判本、『バルト・ドイツ人問題。シレン教授への手紙』<sup>65</sup>がモスクワで出版されたが、それはサマーリンとシレンの議論が公衆によく知られていたことを示すものであろう。またバルト海沿岸地方の主要都市では、ドイツから持ち込まれたシレンの著書が出回り、ロシア内務省はその取締りに神経を尖らせていた<sup>66</sup>。それ以外に、エッカートによる『ロシアの辺境』のドイツ語訳も広く出回っていた<sup>67</sup>。そして翌年には、サマーリンによる反批判の書、『ボック、シレン両氏への返答 — 『ロシアの辺境』に関して』<sup>68</sup>、ポゴーチン前掲書のドイツ語版<sup>69</sup>が出版された。

しかし、1871年以降、バルト・ドイツ人に関する論戦が定期刊行物をにぎわせることはなくなった。『モスクワ報知』を例にとれば、1871年に掲載されたバルト・ドイツ人関連の論説は2本、1872年は4本、1873年と1874年はそれぞれ0本、1875年は1本と推移した。論じることが可能な程度に報道の自由があり、論戦が決着を見たわけでもなければ、バルト海沿岸地方とロシアの関係がドラスティックに変化したわけでもないことを考慮すると、奇妙なことである。また、既に述べたように、ロシア政府はバルト・ドイツ人問題に関する論戦を注視し、それを抑制しようともしてきたが、イサーコフによれば、1869年頃にはもはや真剣に何らかの策を講じることも止めてしまったという<sup>70</sup>。このロシア政府の態度の「曖昧さ」は、それ自体重要な問題であるが、ここでは立ち入らない<sup>71</sup>。ともあれ、バルト海沿岸地方とロシアの関係のあり方を変えるためにロシア政府が積極的に動き始めるのは、1880年代以降のことである。

## 広域共生をめざす政治的ナショナリズム

このような展開の後、ロシアとバルト海沿岸地方にもたらされたものは何であっただろうか。まず指摘できるのが、バルト・ドイツ人のロシア政府およびロシア人に対する不信感である。本稿で論じてきたように、「出版戦争」でロシア側が公衆にアピールしたのは、バルト・ドイツ人の「ドイツ人の陰謀」というべき隠された「野望」であった。バルト・ドイツ人がドイツ・ナショナリズムとは一切無縁だとも言い切れない部分もあるが、その多くにとって、ロシア側が主張する「陰謀」は言いがかりに等しく、受け入れがたいものであったと考えられる。というのは、封建的支配層は、自分たちの生活を保障してくれる中央政府への忠誠は抱いても、特権や出生による差異を否定し平準化しようとするナショナリズムに対しては、敵対的あるいは冷淡である、と一般論として言えるからである<sup>72</sup>。実際、彼らの多くはロシア国家に対して忠実であったと考えられ、それゆえの違和感が明確に表明された史料も残されている。例えば、バルト・ドイツ系の名門貴族の出であるアレクセイ・クルゼンシュテルンという人物が、同じく名門出身の海軍将官フェルディナント・ウランゲリに宛てた手紙（1869年2月25日付）である。クルゼンシュテルンは、『ロシアの辺境』への違和感と不満を次のように表現している。

バルト海沿岸地方にドイツ人が居住し始めてから600年もたった今日になって、サマーリン氏はエストニア人とラトヴィア人のゲルマン化を非難している。これこそバルト・ドイツ人にとって最も重要な政策であり、我々は沿バルト海3県とロシアとのあいだに万里の長城を築き、沿バルト海諸県の分離を目論んでいるらしい。そして我々の最終的な野望は、この諸県とドイツの合併だそうだ。私は怒りとともに、この全く事実無根の中傷を退けたいと思う<sup>73</sup>。

クルゼンシュテルンは、この引用した箇所以外の部分でも、バルト・ドイツ人がいかにロシア帝国に献身的であったか、ドイツではなくロシアに愛着をもってきたかについて、延々と書き連ねている。こうした思いは個人的なものではあるまい。例えば、1869年にエストラント県のバルト・ドイツ人貴族とリフランド福音ルター派教会事務局が作成した「教会問題に関する請願および報告案」<sup>74</sup>という文書においても、バルト・ドイツ人貴族の「自己犠牲」と「国家への貢献」が強調されている。

そして「出版戦争」を契機として強まり、その後も払拭されなかったロシアへの不信感は、1907年に出版されたフェルディナント・ウランゲリ（前出の海軍将官とは別人）の著書にも見出される。第二次ポーランド反乱の頃、デルプト大学の学生だったこの人物は、反乱鎮圧後のロシア社会で、ポーランド人に次いでバルト・ドイツ人にロシア人の敵意が向けられ、社会生活もロシアの影響力が強まっていったと述べている。

ロシア社会の自己意識の高まりは、ポーランド反乱の帰結である。カトコフの巨大な才能を具象化したといえる排他的な潮流は、ポーランド反乱後、バルト海沿岸地方に向いたのであった<sup>75</sup>。

ポーランド反乱鎮圧とともに、『モスクワ報知』を代表者とする潮流が勢いを増すとともに、活気にあふれ、実り多きこの地方の生活のすべてに終止符がうたれた。国家の礎が最終的に確立されたのである。ロシア帝国の全空間に完全に画一的な制度がしかれた。すべての公共施設と公立学校は、ロシア語の導入が求められた。国家の粗雑な計画を実現しづらくしてきた特殊な法律や特権はすべて否定された。要するに、ロシア化である<sup>76</sup>。

### 山本 健三

1860年代に関する叙述としては、誇張が目立つといわざるを得ないが、その時期のカトコフらの活動が1880年代以降に推進される行政面でのロシア化につながる動向と位置づけられていることに目を向けるべきである。ともあれ、「出版戦争」以降、バルト・ドイツ人がロシア人に対して抱いた不信感は、その後長く尾を引いたことが確認できる。

他方、ロシア人のバルト・ドイツ人に対する不信感も指摘できよう。「出版戦争」においてロシア人はバルト・ドイツ人の「ドイツ人の陰謀」「ドイツ・ナショナリズム」を想像したのだが、これと当時の思潮が相俟って、ロシア人のバルト・ドイツ人への不信感は根強いものとなったと考えられる。

1866年の普墺戦争におけるプロイセンの勝利以来、「パン・ゲルマン主義」の脅威がロシアに及ぶ可能性が囁かれるようになったが、これは、具体的には、統一ドイツ構想にバルト・ドイツ人の「分離主義」が結びつく可能性のことである<sup>77</sup>。これに対し、この時期のロシアでは、もはや「スラヴ問題」について論じることもタブーではなくなり、そのような思潮のもとにあった1867年5月、モスクワでスラヴ会議が開催された。これはロシアの世論を70年代に隆盛を迎える「パン・スラヴ主義」へといざなう契機となった<sup>78</sup>。そしてニコライ・ダニレフスキーらパン・スラヴ主義の理論家が描く世界像は、「ロシア＝スラヴ世界」対「ゲルマン＝ローマ世界」というものであり、必然的にドイツ・ナショナリズムとの対決という局面を引き寄せるものであった。

パリ・コミュン崩壊（1871）の後、帝政同士の関係が緊密になり、1870年代前半は、露独軍事同盟（1873）、オーストリアも含めた三帝同盟（1873）が結ばれるなど、露独関係は良好であった。しかし、これはあくまでも国家間関係の話であって、公衆レベルでの対ドイツ人、対バルト・ドイツ人感情は別問題である。この1870年代という時期は、前述のように、定期刊行物でのバルト・ドイツ人関連の論文が激減したため、当時のロシアの対バルト・ドイツ人感情は捉え難いのであるが、それから少し後になると、コンスタンチン・トルブニコフの『ロシアにおけるドイツ人とイエズス会士』（1882）のように、バルト・ドイツ人を含むロシア国内のドイツ人への不信感あるいは嫌悪を直截的に吐露した、排外主義的な著作も見られるようになる。トルブニコフは、ロシアのドイツ人を「ロシア人とスラヴ人の敵」「卑怯者」「陰謀家」「ゴキブリ」などと呼んで、罵倒した<sup>79</sup>。また、同書の「バルト・ドイツ人男爵への返答」という文章では、ロシアのドイツ人が、ロシア人に溶け込もうとしないばかりか、改革を停滞させ、ユダヤ人とともにニヒリズムを蔓延させる悪の元凶であるかのように綴られている<sup>80</sup>。

前述のように、カトコフは多様性を前提とした統合を志向する思想家である。トルブニコフの嫌悪の対象に対する排外主義的な態度にカトコフが共感したとは思えないが、ここでは「出版戦争」後もロシアで国内のドイツ人に対する不信感が継続していたことだけを確認しておこう。

このように、ロシア人とバルト・ドイツ人の相互不信感が残ったのだが、その一方で、ロシア・ナショナリズムの強化・拡大がもたらされたことも指摘しなければならない。「出版戦争」以前のロシア・ナショナリズムは、主にポーランド・ナショナリズムに対抗する過程で成長した。第二次ポーランド反乱が勃発した1863年は、ポーランド反乱によってロシア人の国民意識が促進された年<sup>81</sup>として、ロシア・ナショナリズムにとって決定的に重要である。それに続く1860年代後半の「出版戦争」では、ロシア国家に従順なふりをしながら、「ポーランド人の陰謀」と連携しながら、ドイツ・ナショナリズムの強化を密かに企む「ドイツ人の陰謀」の主体としてのバルト・ドイツ人のイメージが広がった。ここにロシア・ナショナリズムは、「対ポーランド・ナショナリズム」という指向性だけでなく、「対ドイツ・ナショナリズム」という指向性も与えられた。つまり、ロシア民族が主導権をもった政治的民族であるべきであるというロシア・ナショナリズムの概念が拡大され、西部諸県だけでなく、バルト海沿岸地方においても、ロシア人が政治的民

## 広域共生をめざす政治的ナショナリズム

族であるべきだという理念が確立されたということである。

要するに、「出版戦争」がその後のロシア社会に残したものは、「ロシア人とバルト・ドイツ人の相互不信」と「ロシア・ナショナリズムの強化と拡大」である。その中でのカトコフの役割の大きさは、もはや繰り返すまでもないものと思われる。彼は1860年代後半の言論活動によって、ポーランド・ナショナリズムとともにロシア帝国内のドイツ・ナショナリズムの形成を阻止し、ロシア・ナショナリズムの強化と拡大を試みたのである。確認になるが、彼が敵視したのは、バルト・ドイツ人や彼らの文化、宗教、習慣などではなく、ドイツ民族という政治的民族、あるいは潜在的な分離主義勢力としてのバルト・ドイツ人である。そしてロシア民族が、ロシア帝国で唯一の政治的民族としてその支配をバルト海沿岸地方に確立することこそ、カトコフの目標であった。この目標は、1860年代、70年代において実現されたとは言い難い。しかし、ロシアの理念、方向性として、権力者、公衆には定着し、1880年代以降のいわゆる「行政的ロシア化」政策というかたちで、具現化されていくことになる。

### おわりに

以上、バルト海沿岸地方に関する言説を中心に、カトコフのナショナリズムについて論じてきた。それはドイツ語、ルター派信仰、ドイツ文化などの文化的要素に対して中立的なロシア国家を中心として政治的統合をめざすという、「広域共生をめざす政治的ナショナリズム」というべきものであった。カトコフは『モスクワ報知』紙を中心とする言論活動によって、世論を創り出し、この政治的ナショナリズムとしてのロシア・ナショナリズムの強化と拡大を図った。バルト・ドイツ人問題をめぐる「出版戦争」は、彼を中心とした言論キャンペーンであり、「ポーランド人の陰謀」と同様に危険な、「ドイツ・ナショナリズム」「ドイツ人の陰謀」の主体としてのバルト・ドイツ人のイメージを際立たせた。その過程でロシア・ナショナリズムは、「対ドイツ・ナショナリズム」という指向性を獲得し、強化・拡大したことで、カトコフの試みは一定の成功を収めた——これが本稿での考察を通じて、明らかになったことである。

しかし、解明できなかった問題も残されている。それは、本論で若干触れたことだが、1870年代初頭の「出版戦争」の収束という事態に、カトコフはどのように関わっていたのかという問題である。これは、先行研究でも十分に明らかにされていない、なぜ論戦が急速に収束したのか、という問題にも関わってくる問題であり、非常に重要だと考えられる。おそらく、『ロシアの辺境』がアレクサンドル二世の不興を買った、カトコフとアクサーコフがモスクワ県知事に論調を和らげると約束した<sup>82</sup>、などといったイサーコフらの指摘は、問題の背景の一端を示しているであろう。しかし、バルト・ドイツ人問題の根幹（特権問題、農民問題、ロシア語問題等）がドラスティックに変化したわけでもなく、論戦が何らかの決着を見たわけでもない状況で収束したことを考慮すれば、ロシアの最高権力周辺で、何らかの意思が働いたという可能性を想定せざるを得ないのではないだろうか。現時点では推測の域を出るものではないが、筆者は、世論を創る政治的ジャーナリストとしてカトコフが何らかの形でロシア政府とともに「出版戦争」の終結に関わっている可能性があると考えている。この問題の検証は、今後の課題としたい。

また、カトコフの政治的ナショナリズムは、ロシア帝国における広域共生を担保する統合原理として妥当だったのか、陥穽はなかったのかという問題も、本稿では十分に検討することができなかった。この問題は、前述のロシアにおける「多様性の中の統合」の可能性について考える上で、きわめて重要である。テスリャは、カトコフの呈示したナショナリズム概念の弱点として、「文化的ファクターに対する過小評価」<sup>83</sup>を挙げているが、確かにカトコフのナショナリズム論は、政治的統合によるロシア帝国の領土保全を重視するあまり、文化的要素に関する考察

が欠けているように見える。「政治的要素と文化的要素の分離」を標榜する政治的ナショナリズムは、「多様性の中の統合」の実現にとって不可欠な理念である。しかし、現代ロシアのように、実際にエスノ・ナショナリズムが所与のものであるような環境では、支配的民族とその文化の存在自体が「抑圧」であろう<sup>84</sup>。多様性と共生を保障するためには、政治的ナショナリズムを補うような別の理念、方法が必要なのである。カトコフのナショナリズム論は、ロシアの健全かつ強固な統合のために解決すべき課題を呈示しているように思われる。

註

- 1 *Немцев И.А.* Становление дореволюционного российского консерватизма и государственная власть // Вестник Пермского университета. История. 2010. Вып. 2 (14). С. 50.
- 2 『著作集』(全6巻、2010-2012) 以前に、4種類の著作集が出版されている。*Катков М.Н.* Имперское слово. М., 2002; — Империя и крамола. М., 2007; — Идеология охранительства. М., 2009; — Избранные труды. М., 2010.
- 3 *Катков М.Н.* Собрание сочинений в 6 томах. СПб., 2010-2012 (Том 1. Заслуга Пушкина. О литератрах и литературе. — 2010; Том 2. Русский консерватизм. Государственная публицистика. Деятели России. — 2011; Том 3. Власть и террор. — 2011; Том 4. Философские чтения. Статьи. Трактаты. Полемика. — 2011; Том 5. Энергия предприимчивости. Экономика. Образование. Письма. — 2012; Том 6. Pro et Contra. — 2012).
- 4 以下、筆者が閲覧できた2000年以降に発表されたカトコフに関する論考を列挙している。ただし、ロシア保守主義全般に関するもの、概説書、通史的なもの、教科書的なものは省いた。*Архинова М.Н.* Польский вопрос в публицистике русских консерваторов середины XIX в. (М. П. Погодин, М. Н. Катков) // Исторические документы и актуальные проблемы археографии, источниковедения, отечественной и всеобщей истории нового и новейшего времени. Сборник тезисов докладов участников Третьей международной конференции молодых ученых и специалистов «Сііо-2013». М., 2013. С. 28-31; *Биошкина Н.И.* Политико-правовые взгляды Михаила Никифоровича Каткова // European researcher. 2011. № 7 (10). С. 1072-1075; *Брутян А.Л.* Концепция монархизма в творчестве М.Н. Каткова // SCHOLA-2000. М., 2000. С. 64-69; *Ее же.* М.Н. Катков: социально-политические взгляды. М., 2001; *Едошина И.А.* М.Н. Катков: штрихи к портрету // Катковский вестник: Религиозно-филос. чтения: К 190-летию со дня рождения М.Н. Каткова. М., 2008. С. 11-37; *Изместьева Г.П.* Михаил Никифорович Катков // Вопросы истории. 2004. № 4. С. 71-92; *Кантор В.К.* О судьбе имперского либерализма в России (М.Н. Катков) // Философские науки. 2007. № 2. С. 66-91; *Карнишин В.Ю.* Проблемы российского образования в публицистике М.Н. Каткова // «Наука. Общество. Государство». История государства и права. Отечественная история. 2013. № 2 (2). С. 1-7; *Климаков Ю.В.* Пушкинская тема в литературном наследии М.Н. Каткова // Катковский вестник: Религиозно-филос. чтения: К 190-летию со дня рождения М.Н. Каткова. М., 2008. С. 46-58; *Котов А.* Бюрократический национализм Михаила Каткова // Вопросы национализма. 2014. № 1 (17). С. 174-186; *Кудряшев В.Н.* М.Н. Катков в российском имперском дискурсе второй половины XIX века // Вестник ТГУ. История. 2012. № 4 (20). С. 40-42; *Кулешова О.В.* Наследие М.Н. Каткова в современной России. М.: ИНИОН РАН., 2013; *Лесневский Ст.* Александр Блок и Михаил Катков // Катковский вестник: Религиозно-филос. чтения: К 190-летию со дня рождения М.Н. Каткова. М., 2008. С. 115-124; *Мамонова Е.В.* Благотворительность 1860–1880-х гг. в публицистике М.Н. Каткова // Вестник ПСТГУ II: История. История Русской Православной Церкви. 2011. Вып. 4 (41). С. 30–43; *Ее же.* Старокатолическое



## 広域共生をめざす政治的ナショナリズム

- движение в публицистике М.Н. Каткова // Вестник ПСТГУ II: История. История Русской Православной Церкви. 2012. Вып. 4 (47). С. 102–110; *Манаков М.Ю.* Роль политической публицистики в защите государственной безопасности (система взглядов М.Н. Каткова в 1860-е годы) // Вестник ЧГУ. № 22 (313). Филология. Искусствоведение. 2013. Вып. 81. С. 17-23; *Митрохина С.А.* Просветительская деятельность М.Н. Каткова в 1851-1855 гг. // Вестник ВГУ. Сер.: Филология. Журналистика. 2006. № 2. С. 204-208; *Николюкин А.Н.* В.В. Розанов о Каткове // Катковский вестник: Религиозно-филос. чтения: К 190-летию со дня рождения М.Н. Каткова. М., 2008. С. 38-45; *Попов Э.А., Велигонова И.В.* М.Н. Катков: социальный портрет в контексте в меняющейся эпохи (к постановке проблемы) // Вестник Сургутского государственного педагогического университета. 2012. № 4 (19). С. 31-36; *Их же.* Когда слово повелевает Империей: Периодические издания М.Н. Каткова и новые технологии общественно-государственной политики реформирующейся России (середина 1850-х – 1880-е гг.). М.: РИСИ, 2014; *Прокопов Т.Ф.* Взбаламученный антинигилизм: К истории «литературного похода» М.Н. Каткова против революционной демократии // Катковский вестник: Религиозно-филос. чтения: К 190-летию со дня рождения М.Н. Каткова. М., 2008. С. 71-82; *Санькова С.М.* Государственный деятель без должности. М.Н. Катков как идеолог государственного национализма. Историографический аспект. СПб., 2007; *Ее же.* Роль М.Н. Каткова в событиях 1863 г. в освещении отечественной историографии // Вестник МГОУ. Сер. «История и политические науки». 2008. № 3. С. 12-18; *Ее же.* Михаил Никифорович Катков: В поисках места в общественной жизни // Вестник МГОУ. Сер. «История и политические науки». 2008. № 4. С. 22-28; *Ее же.* Либеральный консерватизм как неотъемлемая составляющая государственного национализма на примере политических воззрений М.Н. Каткова // Управление общественными и экономическими системами 2008 № 1. С. 1-19; *Ее же.* Обучение М.Н. Каткова в Берлинском университете как переломный момент в становлении его мировоззрения // Вестник РГУ им. И. Канта. 2008. Вып. 12. Гуманитарные науки. С. 21-26; *Ее же.* Анализ ключевых проблем изучения российской политической истории XIX в. на основе историографии М.Н. Каткова // Вестник ТГУ. История. 2010. № 2 (10). С. 5-13; *Тесля А.А.* «Польский вопрос» в передовицах М.Н. Каткова в «Московских ведомостях» в 1863 г. // Учебные заметки ТОГУ. 2011. Том 2, № 2. С. 86-97; *Чернавский М.Ю.* М.Н. Катков и Б.Н. Чичерин: консервативная и либеральная интерпретации гегелевской диалектики // Experimentum-2007: Сборник научных статей философского факультета МГУ. М., 2007. С. 198-207; *Черниченко Л.Л.* Князь Барятинский и Катков о дворянстве // Катковский вестник: Религиозно-филос. чтения: К 190-летию со дня рождения М.Н. Каткова. М., 2008. С. 59-70; *Шахназаров В.Г.* Специфика отечественного охранительного консерватизма 2-й половины XIX века (на примере анализа мировоззрения и деятельности К.П. Победоносцева и М.Н. Каткова) // Вестник МГОУ. Сер. «Философские науки». 2009. № 4. С. 151-155; *Шириняц А.А.* М.Н. Катков и М.П. Погодин о национально-политическом единстве и целостности России // Катковский вестник: Религиозно-филос. чтения: К 190-летию со дня рождения М.Н. Каткова. М., 2008. С. 90-103; *Его же.* Катков Михаил Никифорович // *Его же.* Нигилизм или консерватизм? (Русская интеллигенция в истории политики и мысли). М., 2011. С. 508-514.
- 5 *Лебедева Г.Н.* Социально-философская концепция русского консерватизма в творчестве М.Н. Каткова. Дис. ... канд. филос. наук. СПб., 1996; *Полякова Н.В.* Ж.де Местр и политическая философия русского консерватизма второй половины XIX в.: М.Н. Катков, Ф.И. Тютчев. Дис. ... канд. филос. наук. СПб., 1996; *Первалова Е.В.* Журнал М.Н. Каткова «Русский Вестник» в первые годы издания: Литературная позиция. Дис. ... канд. филол. наук. М., 1998; *Брутян А.Л.* Социально-политические взгляды М.Н. Каткова. Дис. ... канд. полит. наук. М., 1999; *Маркелов Е.В.* А.И. Герцен и М.Н. Катков. Борьба

- демократического и охранительного направлений в русской публицистике. Дис. ... канд. ист. наук. М., 2000; *Новиков А.В.* Российские консерваторы М.Н. Катков, Д.А. Толстой, К.П. Победоносцев и самодержавие, середина XIX - начало XX вв. Дис. ... канд. ист. наук. М., 2001; *Деревягина Е.В.* «Московские ведомости» М.Н. Каткова (1863-1887) в русском литературном процессе. Дис. ... канд. филолог. наук. Великий Новгород, 2004; *Бугаева В.Н.* Консервативно-педагогическая концепция М.Н. Каткова. Дис. ... канд. педагог. наук. Смоленск, 2007; *Кругликова О.С.* Опыт конструктивного сотрудничества журналистики и власти в пореформенной России: публицистика и общественная деятельность М.Н. Каткова. Дис. ... канд. филолог. наук. СПб., 2008; *Санькова С.М.* Идеология российского государственного национализма второй половины XIX - начала XX вв. Дис. ... д-ра ист. наук. М., 2009; *Шахназаров В.Г.* Философско-антропологические воззрения К.П. Победоносцева и М.Н. Каткова. Дис. ... канд. филос. наук. Нижний Новгород, 2009; *Шипилов С.Н.* Эволюция идеологии русского пореформенного консерватизма: этнокультурные и политические аспекты: по произведениям М.Н. Каткова. Дис. ... канд. ист. наук. М., 2009; *Давудов Д.А.* Политико-правовые воззрения М.Н. Каткова. Дис. ... канд. юрид. наук. Сочи, 2013.
- 6 Михайл・ポゴージン、ヴラジーミル・メシチェルスキー、コンスタンティン・ポベドノースツェフ、レフ・チホミーロフに関する学位論文の数は、筆者の調査では、それぞれ3件、6件、10件、7件である。
- 7 ロシアにおける「多様性の中の統合」論の代表的論者は、民族学者ヴァレリー・チシコフである。彼は1994年、次のように述べている。「ロシアとは、ロシア人(русские)、ヤクート人、タタール人、チュクチ人、朝鮮人、ウクライナ人、その他多くのロシア領内に居住し、市民権を有する主な民族集団から構成されるロシア人(россияне)の国民国家である」(*Тишков В.А.* Россия как национальное государство // Независимая газета. 26 января 1994)。チシコフ以外にも、「多様性の中の統合」というスローガンをソ連崩壊後のロシアが進むべき方向性として認識している研究者には、アレクサンドル・ヴドヴィン、アンナ・コスチナ、ヴラジーミル・ソグリン、ユーリー・グラニン、オルガ・マリノワ、アブドゥッラ・ダウドフらがいる。また近年のプーチン大統領自身、「市民間の平和と民族間の同意は、一度形成されればそれきりというものではなく、永遠に動かない絵画とは違う。それどころか、それは不断に続く動き、対話なのである。それだけにそれは注意を要する国家と社会の仕事であり、正確無比な決定、考え抜かれた賢明な政治によって「多様性の中の統合」は可能となる」と述べるなど、「多様性の中の統合」という理念の実現を志す主旨の発言をしている(*Путин В.В.* Россия: национальный вопрос // Независимая газета. 23 января 2012)。
- 8 *Манаков М.Ю.* Роль политической публицистики в защите государственной безопасности (система взглядов М.Н. Каткова в 1860-е годы) // Вестник ЧГУ. № 22 (313). Филология. Искусствоведение. 2013. Вып. 81. С. 17-23
- 9 Там же, С. 22.
- 10 *Санькова С.М.* Идеология российского государственного национализма второй половины XIX – начала XX вв. (Исторический аспект). Автореф. дис. ... д-ра ист. наук. М., 2009. С. 28.
- 11 *Карпович М.М.* Лекции по интеллектуальной истории России (XVIII – начало XX века). М., 2012. С. 224.
- 12 T.G. マサリク(石川達夫・長興進訳)『ロシアとヨーロッパⅡ:ロシアにおける精神潮流の研究』成文社、2004年、185頁。
- 13 *Исаков С.Г.* Остзейский вопрос в русской печати в 1860-х гг. Тарту, 1961.
- 14 *Твардовская В.А.* Идеология пореформенного самодержавия (М.Н. Катков и его издания). М., 1978.
- 15 Marc Raeff, “A Reactionary Liberal: M. N. Katkov,” *Russian Review*. 11, no 3 (July 1952), pp. 157-167; Edward C. Thaden, *Conservative Nationalism in Nineteenth Century Russia* (Seattle: University of

## 広域共生をめざす政治的ナショナリズム

- Washington Press, 1964); Martin Katz, *Mikhail N. Katkov: A Political Biography 1818-1887* (The Hague: Mouton, 1966); Karel Durman, *The Time of the Thunderer: Mikhail Katkov, Russian Nationalist Extremism and the Failure of the Bismarckian System, 1871-1887* (New York: Columbia University Press, 1988).
- 16 1721年9月、ニスタット講和条約に基づきロシア帝国に編入されたバルト海沿岸地方は、*остзейцы* と呼ばれるドイツ系の特権階層（バルト・ドイツ人）が支配し、西欧から押し寄せる自由化、民主化の波を遮断する専制の「砦」を築いていた。また、ロシアの近代化を担った数多くの官僚、軍人、科学者などの人材を輩出し、ロシア政府に対しても多大な影響力をもっていたため、公然と彼らを批判することは困難であった。最も早い公然たるバルト・ドイツ人批判者は、ガルリプ・メルケル（1769～1850）というリフランド出身のバルト・ドイツ系知識人とされている。啓蒙思想の影響を受けた彼は、バルト・ドイツ人領主貴族によるラトヴィア人農民に対する非人道的扱いを告発する『ラトヴィア人』（1797）をドイツで発表した。同書はヨーロッパで大反響を呼んだ。しかし、地元のリフランドに内容が伝わると、メルケルは誹謗と中傷に曝された。また同書がリフランドに持ち込まれると、ただちに地主によって買い占められ、焼却されていたという。См.: Гарлиб Меркель и его книга о латышах в XVIII веке // Русский архив (1870). М., 1871. С. 1010.
- 17 1867年10月25日付の通達で、内務省検閲局は、バルト海沿岸地方の検閲官に次のように指示している。「ロシアで流通しているドイツ系出版物とロシア系出版物のあいだで、バルト海沿岸の問題に関する論争が生じている。当局はこの論争が過熱化、長期化すると見ており、一時的に世論が激昂する可能性も想定している。やむを得ない場合は、当然ながら、双方を抑制するために相応の手段の行使も辞すべきではない。[……] 検閲の過程で、出版物に双方の民族的苛立ちを喚起しそうなものが見つければ、削除しなければならない」(LVVA (Latvijas valsts vestures arhīvs), ф. 3, оп. 5, д. 1864, л. 45)。
- 18 1868年に内務大臣に就任した直後のアレクサンドル・ティマシヨフは、沿バルト海諸県総督ピョートル・アルベジンスキーに対し、次のように書き送っている。「現時点では、バルト海沿岸地方の農民の土地制度に関する問題全体を提起する必要性を認めていないが、[……] この地方の将来に関する問題がロシア社会の主だった人々の注目を集めていること、そしてロシアの定期刊行物の主宰者の多くが特殊な原因ではなく、地域事情と現行秩序の総体から生じる一般的現象、個々の事実の一切を体系的に提起する準備をしていることは、あまりにも明白である。政府、バルト海沿岸地方の諸制度に反対する世論の注意を喚起しようとする試みは、何度となく行われてきたし、ジャーナリズムも異常な熱心さでことあるごとにこの問題に回帰している」(ОР РНБ (Отдел рукописей Российской национальной библиотеки), ф. 16, ед.хр. 16, лл. 16-16об.)。
- 19 *Феохтистов Е.М.* Воспоминания. За кулисами политики и литературы. 1848-1896. Л., 1929. С. 105.
- 20 例えば、トヴァルドフスカヤは、次のように述べている。「カトコフは「意見」の表現者を超える存在であった。彼の新しさは、公権力の外にしながら、政府に政治綱領を暗示し、その断固たる実行に導いていたことであった」(*Твардовская В.А.* Идеология пореформенного самодержавия (М.Н. Катков и его издания). М., 1978. С. 30)。なお、カトコフが事実上の権力者として振舞ったのはアレクサンドル三世の時代という見解もあるが、少なくとも1866年にはアレクサンドル二世に直接意見を述べる立場にあったことを考慮すると、彼の政治力はアレクサンドル二世の時代に既に確立されていたと考えられる (См.: *Попов, Велигонова. М.Н. Катков.* С. 34)。また、カトコフの存在意義も、時代によって変化していったようである。オルガ・クルグリコワによれば、1860年代のカトコフは、ポーランド反乱の頃の「舌鋒の鋭さ」で得た「国民的」支持によって社会的影響力を獲得した。1870、80年代には、『モスクワ報知』はエリート向けの新聞に変容し、大衆的な人気を失ったが、保守的な改革を主導するエリート層の支持を獲得し、新聞の発行部数の減少にもかかわらず、カトコフの影響力は却って高まったという (См.: *Кругликова. Опыт конструктивного сотрудничества.* С. 24)。

## 山本 健三

- 21 例えば、次の研究では、カトコフもスラヴ主義者も「パン・スラヴ主義者」として括られている。  
Astrid S. Tuminez, *Russian Nationalism since 1856: Ideology and the Making of Foreign Policy* (New York: Roman&Littlefield Publishers, 2000), p. 70; 川村清夫『プラハとモスクワのスラヴ会議』中央公論事業出版、2008年、122頁。
- 22 *Капелер А.* Образование наций и национальные движения в Российской империи // *Российская империя в зарубежной историографии.* М., 2005. С. 422-423.
- 23 *Реннер А.* Изобретающее воспоминание: Русский этнос в российской национальной памяти // *Российская империя в зарубежной историографии.* М., 2005. С. 459.
- 24 *Санькова.* Идеология российского государственного национализма. С. 29.
- 25 *Санькова С.М.* Либеральный консерватизм как неотъемлемая составляющая государственного национализма на примере политических воззрений М.Н. Каткова // *Управление общественными и экономическими системами* 2008 № 1. С. 1-19; *Шириняну А.А.* Катков Михаил Никифорович // *Шириняну А.А.* Нигилизм или консерватизм? (Русская интеллигенция в истории политики и мысли). М., 2011. С. 508-514; *Тесля А.А.* «Польский вопрос» в передовицах М.Н. Каткова в «Московских ведомостях» в 1863 г. // *Учебные заметки ТОГУ.* 2011. Том 2, № 2. С. 86-97; *Кудряшев В.Н.* М.Н. Катков в российском имперском дискурсе второй половины XIX века // *Вестник ТГУ. История.* 2012. № 4 (20). С. 40-42.
- 26 *Санькова.* Либеральный консерватизм. С. 6.
- 27 Там же.
- 28 *Шириняну А.А.* Катков М.Н. // *Общественная мысль России XVIII – начала XX века: энциклопедия.* М., 2005. С. 198.
- 29 *Катков М.Н.* Цельность и однородность Русского государства // *Катков М.Н. Собрание сочинений: В 6 т. Т. 2. Русский консерватизм.* СПб., 2011. С. 191-192.
- 30 Там же, С. 187.
- 31 Там же, С. 191.
- 32 *Шуклин А.В.* Глобализационная перспектива Российской цивилизации // *Вестник Пермского университета. Философия. Психология. Социология.* 2012. Вып. 3 (11). С. 121.
- 33 付言すれば、ドイツには、コンスタンティン・フランツ (1817 ~ 1891) のように、プロイセン東方における大戦争を夢想しつつ、東方拡大に積極的でなかったビスマルクを批判し、バルト海沿岸地方とプロイセンとの連邦化を唱える思想家もいた。この人物は、大ドイツ主義および小ドイツ主義が国民国家的な統合イデオロギーだったのに対し、主にハプスブルク帝国の多民族をも包み込む領域をも政治的統合の対象とする「中欧」構想を唱え、ドイツの国民国家的統合に異議を唱えた。ただし、この構想が現実的な政治的影響力を持ったことは、殆どなかったようである (板橋拓己「ドイツ問題と中央連邦構想：コンスタンティン・フランツを中心に」『北大法学論集』第57巻6号、2007年、312 ~ 277頁参照)。
- 34 См.: *Машкин М.Н.* Бисмарк и «остзейский вопрос» в России // *Россия и Германия.* Вып. 4. М., 2007. С. 78-81.
- 35 ГАРФ (Государственный архив Российской Федерации), ф. 109, 1-я экс. оп. 39, д. 78, л. 77.
- 36 *Исаков С.Г.* Остзейский вопрос в русской печати 1860-х годов. Тарту, 1961. С. 30.
- 37 Там же.
- 38 ГАРФ, ф. 109, 1-я экс. оп. 39, д. 78, л. 77.
- 39 *Катков М.Н.* О германизации эстов и латышей // *Катков М.Н. Собрание передовых статей Московских ведомостей.* 1864 год. М., 1897. С. 294.
- 40 *Катков М.Н.* Остзейский вопрос не есть немецкий вопрос в России // *Катков М.Н. Собрание*

## 広域共生をめざす政治的ナショナリズム

- передовых статей Московских ведомостей. 1865 год. М., 1897. С. 286.
- 41 Катков М.Н. Единство между верховной властью и народом. Остзейский сепараизм // Катков М.Н. Собрание передовых статей Московских ведомостей. 1865 год. М., 1897. С. 832.
- 42 Аксаков И.С. О положении остзейских крестьян // Аксаков И.С. Полное собрание сочинений (Прибалтийский вопрос / Внутренние дела России). Т. 6. М., 1887. С. 61.
- 43 Исаков. Остзейский вопрос. С. 79; Духанов М.М. Остзейцы. Политика остзейского дворянства в 50 – 70-х гг. XIX в. и критика ее апологетической историографии. 2-е переработанное и дополненное издание. Рига, 1978. С. 188.
- 44 ОР РГБ (Отдел рукописей Российской государственной библиотеки), ф. 265, к. 85, ед.хр. 2, лл. 2-3.
- 45 Самарин Ю.Ф. О православии в прибалтийских губерниях // Самарин Ю.Ф. Сочинения. Т. 9. М., 1898. С. 449.
- 46 Там же, С. 450.
- 47 『通信』紙は、ニコライ・ベゾブラーツフを実質的な創始者とし、ピョートル・ヴァルーエフ、ヴラジーミル・オルリョフ＝ダヴィドーフ、ボリス・ゴリーツィン、ピョートル・シュヴァーロフなど、親バルト・ドイツ的な貴族の有力者の支援を受けていた。См.: Христфоров И.А. «Весть» // Общественная мысль России XVIII – начала XX века: Энциклопедия. М., 2005. С. 84.
- 48 Самарин Ю.Ф. О политическом идеале газеты «Весть» // Самарин Ю.Ф. Сочинения. Т. 9. М., 1898. С. 457.
- 49 Самарин Ю.Ф. Окраины России. Сер. I. Русское балтийское поморье. Вып. I. Прага, 1868. С. 41.
- 50 Там же, С. 146.
- 51 Там же, С. 163.
- 52 Там же.
- 53 Там же, 164.
- 54 Аксаков И.С. По поводу «Окраин» Ю.Ф. Самарина // Аксаков И.С. Полное собрание сочинений (Прибалтийский вопрос / Внутренние дела России). Т. 6. М., 1887. С. 64.
- 55 『モスクワ』の廃刊理由は、「貴族に、粗暴で憎らしいイメージを付与した」「貴族および現地行政機関が反ロシア的であると非難した」などであった。См.: О прекращении издания газеты «Москвы» // Материалы о цензуре и печати / Под ред. В.П. Ширкова. Ч. 2. СПб., 1870. С. 12-13.
- 56 Катков М.Н. Книга г. Самарина «Окраины России» // Катков М.Н. Собрание передовых статей Московских ведомостей. 1868 год. М., 1897. С. 509.
- 57 Катков. Книга г. Самарина. С. 510.
- 58 Самарин. Окраины России. С. 37.
- 59 1863年、ニコライ・ストラーホフは、『時間 (Время)』第4号で、ポーランド人問題を「致命的問題」と呼び、それをロシアの将来を決定づける問題と位置づけた。См.: Горизонтов Л.Е. Польский вопрос в кругу «роковых вопросов» Российской Империи (1831 год – начало XX века) // Государственное и муниципальное управление в России: История и современность: Сборник научных трудов. Самара, 2004. С. 67.
- 60 Там же.
- 61 Катков М.Н. Агитация поляков в прибалтийском крае // Катков М.Н. Собрание передовых статей Московских ведомостей. 1868 год. М., 1897. С. 3.
- 62 Балто・ドイツ人によるサマーリン批判として、次の出版物が挙げられる。Carl Schirren, *Livländische Antwort an Herrn Juri Samarin* (Leipzig: Duncker und Humblot, 1869); Woldemar von Bock, *Der deutsch-russische Konflikt an der Ostsee: Zukünftiges, geschaut im Bilde der Vergangenheit und der Gegenwart* (Leipzig: Duncker und Humblot, 1869); Julius Eckardt, *Kommentare* // Jurij Samarin, *Das*

## 山本 健三

*russisch-baltische Küstenland im gegenwärtigen Augenblick* (Münster: Lit, 1869).

- 63 カトコフは、『サマーリン氏に対するリフランド人の返答』の出版から失職、出国に至るまでのシレンの行動に「計画性」を見出している。例えば、カトコフは次のように述べている。「出版時には既にロシアからの出国を決意していた。〔……〕シレンはデルプットの教職を失ったが、物質的には何も失っていない」(Катков М.Н. Отставка Ширрена профессора русской истории // Катков М.Н. Собрание передовых статей Московских ведомостей. 1869 год. М., 1897. С. 326)。確かに、シレンはその後もバルト・ドイツ人支援者の資金援助で活動を続け、1874年から1910年に死ぬまで、キール大学教授を務めた(См.: Озолинь П. Остзейское наследие в деятельности общества им. К. Ширрена в ФРГ // Германия и Прибалтика: Сборник научных трудов. Рига, 1983. С. 39)。
- 64 例えば、大地主貴族で、アレクサンドル二世の相談役でもあったヴラジミール・オルロフ＝ダヴィドフは、日記に次のように記している。「サマーリンの『ロシアの辺境』に対する返答として書かれたという、シレンの憤怒の書を読んでいる。これはサマーリンの本がもたらした大悪を証明するものであり、彼に煽られた激情を予感させるものである」(РГАДА (Российский государственный архив древних актов), ф. 1273, оп. 1, ед.хр. 13. С. 288)。また1869年当時沿バルト海諸県総督だったピョートル・アルベジンスキーも、次のように述べている。「サマーリンもシレンも、我々には何の役にも立たないことははっきりしている。前者は沿バルト諸県から純粋なロシア諸県を創ろうとしている。〔……〕後者は、ロシアの権力下でありながら、(ロシアとは)別個の集合体を、エストラントとリフランドから、可能ならクルラントも含めて創設することを要求している。あまりにも思慮を欠いた、歴史とロシア人の民族意識に反した野望である。政府の活動において同様なことが行われようものなら、危険な禍根が残ることは間違いない」(ОР РНБ, ф. 16, ед.хр. 23, л. 29)。
- 65 Погodin М.П. Остзейский вопрос. Письмо к профессору Ширрену. М., 1869.
- 66 См.: LVVA, ф. 3, оп. 5, д. 1864, лл. 52-52об.
- 67 См.: Катков М.Н. «Окраины России» Самарина, переведенные Эккардтом с комментариями переводчика // Катков М.Н. Собрание передовых статей Московских ведомостей. 1869 год. М., 1897. С. 602.
- 68 Самарин Ю.Ф. Ответ гг. ф. Бокку и Ширрену по поводу «Окраин России». Берлин, 1870.
- 69 Mikhail P. Pogodin, *Offener Brief an Herrn Professor Schirren ueber dessen Buch: Livländische Antwort* (Berlin: V. Behr's Buchhandlung, 1870).
- 70 Исаков. Остзейский вопрос. С. 154, 157.
- 71 「曖昧さ」について補足すると、これは、ロシア政府はバルト海沿岸地方の抜本的な改革に着手しなかったが、だからといって、当時の政府関係者がこの地方の特殊な体制の維持が正当で可能性のある方向性だと考えていたわけではない、という状況をさしている。1868年3月まで内務大臣を務めたピョートル・ヴァルーエフは、改革の必要性を認め、バルト・ドイツ人貴族に対して一方的に妥協するという態度は避けつつも、常に彼らの感情に配慮し、郷改革や「ロシア語導入に関する政令」など、既存の権利を侵さない程度の改革にとどめ、慎重な態度で臨んだ。1860年代末から70年代初頭にかけてのロシア政府のバルト・ドイツ人に対する態度について、筆者は次の論考で論じたことがある。Ямамото К. Конец «печатной войны» по остзейскому вопросу в начале 1870-х гг. // К 400-летию Дома Романовых. Монархии и династии в истории Европы и России: Сборник материалов международной научной конференции: в 2 ч. СПб., 2013. Ч. 2. С. 254-258.
- 72 橋川文三『ナショナリズム:その神話と論理』〔新装改訂版〕紀伊國屋書店、2005年、42～43頁参照。
- 73 EA (Eesti Ajaloohiiv), ф. 2057, оп. 1, ед.хр. 426, лл. 14об.-15.
- 74 EA, ф. 2057, оп. 1, ед.хр. 427, лл. 1-1об.
- 75 Врангель Ф.Ф. Остзейский вопрос в личном освещении. СПб., 1907. С. 15.
- 76 Там же, С. 21.

## 広域共生をめざす政治的ナショナリズム

- 77 例えば、ミハイル・バクーニンは、1870年前後の著作で、「パン・ゲルマン主義」がバルト海沿岸地方に拡大する可能性を指摘した。*Бакунин М.А. Кнута-германская империя и социальная революция // Бакунин М.А. Философия, социология и политика. М., 1989. С. 253.*
- 78 大矢温「チュツチェフと1867年スラヴ会議」『ロシア思想史研究』第1号、2004年、95頁参照。
- 79 *Трубников К.В. Пролазы и интриганы // Трубников К.В. Немец и иезуит в России (Очерки и характеристики I). СПб., 1882. С. 1-2.*
- 80 *Трубников К.В. Ответ остзейскому барону // Трубников К.В. Немец и иезуит в России (Очерки и характеристики I). СПб., 1882. С. 45-59.*
- 81 *Тесля А.А. Первый русский национализм... и другие. М., 2014. С. 36.*
- 82 *Исаков. Остзейский вопрос. С. 156-157.*
- 83 *Тесля. «Польский вопрос» в передовицах. С. 95.*
- 84 ユーリー・グラニンによれば、エスノ・ナショナリズムの主な担い手は地方の知識人で、彼らの影響で、ロシア連邦を構成する各共和国の高等教育機関で、教育の「地域化」と「特殊化」が見られるという。また、似非科学的な根拠に基づく自民族の優位性を強調する教育が行われ、ロシアの国家的統合の阻害要因になっているという。*Градин Ю.Д. Формирование российской нации: Об одном неосуществленном проекте // Свободная мысль. 2012. № 7/8 (1634). С. 17.*